

教科書に載った濱口梧陵翁

歴史的な出来事が多くの皆様に伝えられるのは、現代社会では新聞、テレビがあります。近年はインターネットなどで世界へ伝わっています。しかし、過去の時代では歴史が伝わるのはやはり教科書が一番だったと思います。ひょっとしたら歴史的に重要な出来事というのは、教科書に取り上げられた事だからであったかもしれません。

「濱口梧陵」翁の安政津波の際の偉業が全国の皆様には知られたのは、「稲むらの火」が教科書に掲載されたことだったと思います。私たちも、昭和12年から15年度まで尋常小学校、16年度から22年度まで国民学校の教科書へ載っていました、と説明して参りました。確かに、ラフカディオ・ハーン、小泉八雲のA Living God(生ける神)を原作とした中井常蔵さんの「稲むらの火」が掲載されたのでした。

ところが、これより前に小泉八雲のA Living Godを元にした「濱口五兵衛の話」や「五兵衛大明神」が教科書に掲載されていたことが分かりました。



濱口五兵衛の話

この事件の起った頃五兵衛はかなりの老人であった。その家は村でも物持であった上、長い間村の庄屋を勤めたので、五兵衛は村の人々から尊敬されてゐた。村の人たちはいつも五兵衛を「濱口のおぢいさん」と呼んだが、村第一の金持なので「濱口の大盡」ともいってゐた。五兵衛はいつも小作人や貧乏漁師の為になることばかりしてゐた。喧嘩の仲裁から、困った時の金の立替、時には貧乏人に只同様にお米を賣ってやったりした。五兵衛の大きな草葺の家は、一つの灣を見おろした小さい高臺の上に建ててあった。この高臺

は、小さい段々の水田が濱の方へと並んで居て、三方は山に取巻かれてゐた。この土地は、海に向かって、その山の腹から濱邊までめぐり取ったやうになってゐて、五兵衛の家は、その中程の高臺にあった。(中略)

彼等は、五兵衛の魂は全く神の如きものであると思った。そこで其の御魂のために、一つの社を建てて、鳥居の上には金字で「五兵衛大明神」の額をかけた。村中は少しも其の尊さを疑ふことなく、この神の前に祈と供物とを捧げた。

それについて老人はどう感じたか。それは私は知らない。只私の知って居るのは、下の村で彼が神として祀られて居る時、彼は山の上の古い草葺屋根の中で、子供や孫たちと一緒に、前の通り人間らしく質素に住んで居たことである。もう彼が死んでから百年以上になるが、神社はやはり存在してゐて村人の祈は、この善良な老人の御魂に向って、今も捧げられてゐるといふことである。

このような話が載っているのです。また、昭和22年以降も道德の副教材も含めて各種の教科書等に掲載していたようです。現在は、4年生の社会科等に掲載しています。まだまだ全部を調べきれていませんが、興味のある方はご連絡ください。資料を差し上げることもできます。

＜行事の変更について＞

「やかただより」4月号でお知らせいたしました「濱口梧陵生誕200年」記念事業の変更についてお知らせいたします。新型コロナウイルス感染拡大防止のために、

6月14日(日)濱口梧陵生誕200年記念シンポジウムと6月15日(月)生誕記念式典は、中止です。
6月15日の稲むらの火講座は延期いたします。

6月15日は月曜日で通常は休館日ですが、今年は生誕200年当日ですので、開館し、無料とします。お誘いあわせの上、ぜひご来館ください。お待ちしております。

濱口梧陵が蒔いた教育の種

— 耐久学舎の物語 —

今年も、はや6月。春から夏へ移行する蒸し暑い季節を迎えました。広川町の皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。時節柄、お互い大いに自愛したいですね。



著者紹介
四天王寺大学教授
慶應義塾大学客員研究員
曾野 洋氏

1964年和歌山県生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、神戸大学大学院修士課程、名古屋大学大学院博士課程、慶應義塾大学SFC研究所上席所員、慶應義塾福澤研究センター客員所員、四天王寺大学教育学部長、同大学IR戦略統合センター長などを経て、四天王寺大学教授、慶應義塾大学研究員を兼任。2012年より毎日新聞にて、「範は紀州史にあり」を連載中。

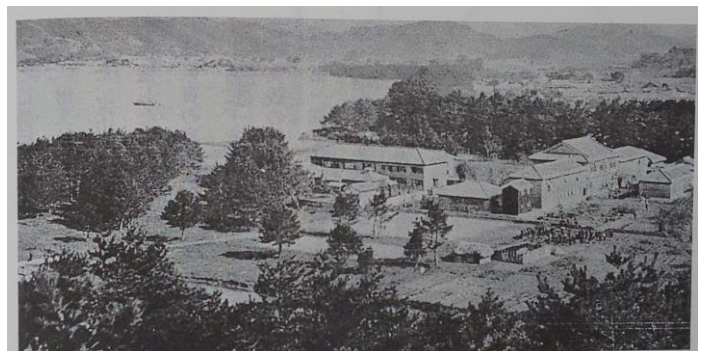
先月の11日に、新型コロナウイルスの重点対策が必要な「特定警戒都道府県」に含まれない34県のうち鹿児島や長崎などの一部地域では、公立の小中学校ならびに高等学校が授業を再開しました。ひとまずは、めでたい。しかしながら、新型コロナは、まだまだ油断することができません。2度目の感染爆発の可能性も残されているからであります。

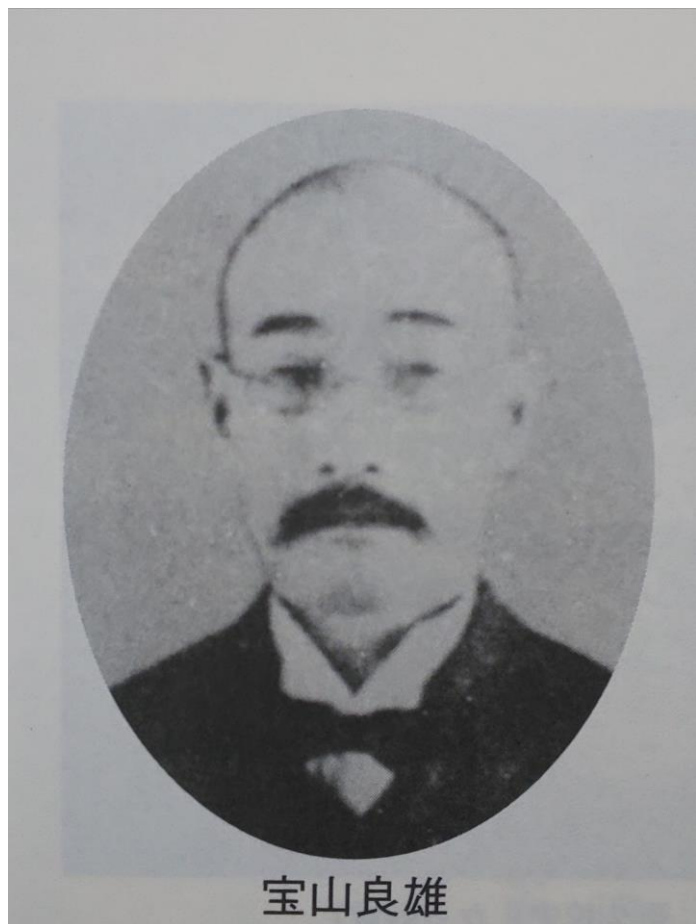
歴史人口学の泰斗である速水融（はやみ・あきら）氏が残した『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（藤原書店）によると、1918（大正7）年10月頃から、わが国で大流行したいわゆる「スペイン風邪」は猛威をふるい、東京では「各病院は満杯となり、新たな『入院は皆お断り』の始末であった」といいます。そして、1920年夏に収束するまでに大きな2度の感染拡大をおこした「スペイン風邪」は、総感染者約2380万人、死者約38万9000人という悲惨な結果をもたらしたようです（内務省記録）。ただし、速水氏の試算によれば死者はもっと多く、およそ45万3000人を数えます。ちょうど100年前の歴史を、記憶の一部にとどめたいものです。

できることならば、新型コロナウイルスのワクチンが完成していない今、これ以上の感染拡大をおこしたくない。ひき続き3密（密閉空間・密集場所・密接場面）を可能な限り避け、手洗いも徹底するなど、国民一人ひとりが注意すべきことは多いと思われます。（本稿は、5月中旬に執筆したものです。）

皆さま、こんにちは。「濱口梧陵生誕200年未来会議」（会長・西岡利記町長）委員の、曾野 洋（その・ひろし）です。6月14日に私が基調講演する予定だった濱口生誕200年記念シンポジウム（於、広川町）は、新型コロナのため中止となりました。私の勤務する大学も、対面授業でなく遠隔授業です。すなわち、オンライン対応で学生指導などを実施しているところです。学生諸君に直接会えないのも、なかなかつらいものであります。

さて、「やかただより」で続けてきたこの連載（全4回）は、今回が最終回です。今日はまず、私が編纂委員として参画して公刊した共編著『和歌山県教育史』全3巻（県教育委員会）から、2枚の写真を紹介します。私立耐久学舎全景と、その舎長（校長）に就任した宝山良雄（1869～1928年）を写したものです。





宝山良雄

濱口梧陵が1852（嘉永5）年、有田郡広村（現在の広川町）にて、同郷の有力者と共に開設した稽古場では当初、田辺藩士を招き村内子弟に剣法を教えたといひます。その後、稽古場は1866（慶應2）年に耐久社と改称。明治維新を迎えてからの耐久社は武術鍛錬に加えて、国学と漢学を教授する学び舎へと発展します。このように濱口が仲間と一緒に郷里で蒔いた教育の種は、芽を出したわけでありませう。

発芽した耐久社は、1892（明治25）年になると耐久学舎と改称します。私立耐久学舎には、次のような物語がありました。前掲『和歌山県教育史』を発刊するために集めた資料や参考文献などに依拠しながら、「私立耐久学舎、勢い挽回へ」という拙文を「毎日新聞」和歌山面（2014年11月19日）にて執筆したことがあります。以下で、読みやすく編集したうえで抄録しましょう。

「今から110年前の有田郡広村（現広川町）に、ひとつの使命をもった人物が県外からやってきた。1904（明治37）年に私立耐久学舎（今の県立耐久高校）へ舎長として赴任した宝山良雄だ。宝山は金沢生まれで、同志社や米国エール大学哲学科などに学んだ俊秀である。彼を学舎へ推薦したのは、和歌山出身で東京朝日新聞記者や随筆家として活躍した杉村楚人冠（すぎむら・そじんかん）だ。実は宝山が着任した当時の県内の中等教育界では、文部省の中学校令に準拠した5校が、すでに生徒や保護者の人気を独占しつつあった。5校とはすなわち、県立和歌山中学校・県立徳義中学校・県立田辺中学校・県立粉河中学校・県立新宮中学校のことである。私立耐久学舎の源流は、ヤマサ醤油オーナーで紀州藩重役や初代和歌山県会議長などを歴任した濱口梧陵が1852（嘉永5）年に開設した稽古場に遡る。つまり、宝山が舎長就任当時の耐久学舎は、すでに半世紀以上の歴史を誇っていたのだ。しかし、明治時代の後半になると、耐久学舎は後発した県立中学校に人気の点で押され気味となる。そこで、＜学校の勢いを挽回すべし＞という使命を果たすため、県外から舎長に抜擢されたのが宝山良雄である。宝山舎長が、競合校である先の5校に勝つために採用した戦略とは何か。宝山良雄に学ぶべき＜学校改革の突破口＞について、次回、多角的に論じたい」

上記拙文の続きが、いよいよ興味深い耐久学舎物語の展開であります。その展開内容には、＜9月入学論＞まで浮上する現代の学校教育改革のヒントが満ちあふれています。そうしたヒントに関して私は、さまざまな機会を通じて、これからも発信する決意です。新型コロナが収束し、広川町を再訪できる日を鶴首して待ちます。（了）

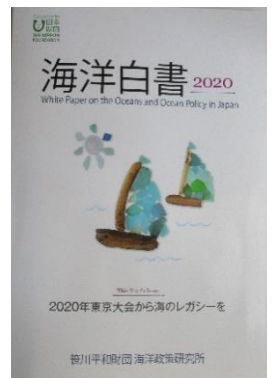
広川町日本遺産観光アンケートより

広川町役場産業建設課では、平成30年の日本遺産認定以来、来町者にアンケート調査への協力を依頼をされていますが、令和元年度の結果をいただきました。ここでは、「稲むらの火の館」へ来館された方々で、アンケート回収箱に投函されたものの集計結果です。

来館の男女比は、男子42%、女子55%、年齢は10代が35%というのは、小中学生が多いということでしょう。60代・70代がそれぞれ16パーセントは高齢者が多いという事です。住所地は広川町を含む和歌山県内は38%、近畿地方45%、近畿県外13%ということですので、比較的遠くからも来館されているということです。「濱口梧陵記念館」もそうですが、「津波防災教育センター」で津波はもちろん、他の災害の際の避難等を学んでいるのだと思います。南海トラフ巨大地震が近づいている今日、よりいっそう、防災と避難の重要性を学んで欲しいと思います。
~~~~~

【海洋白書】から

(公益財団法人)笹川平和財団 海洋政策研究所から、2020年度の海洋白書が送られてきました。わが国の海洋の諸問題への総合的・横断的な取組みに資することを目的の資料集だそうです。当館には一昨年から送っていただき、資料として保存しています。



今回少しご紹介します。

今年は、延期されたとは言え、東京オリンピック・パラリンピックに向けての特集があります。そして、海洋産業として、洋上風力発電、海底鉱物資源の開発、もちろん海運のこともあります。海洋を含む水産業の課題はいつものことでしょう。最近では、海洋プラスチックごみが大きな問題になっていますね。沿岸域の防災では、東海・東南海・南海地震・津波対策も大きく取り上げられています。

これまでの2冊を含めて保存していますので、興味のある方は来館され、ご覧ください。

こんにちは！「こども梧陵プロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！

原稿執筆時(4月半ば)は、新型コロナウイルス感染症の影響で、両大学は休講中です。今回も前号に引き続き、昨年度のガイド実施時に、稲むらの火の館の来館者に広小学校の児童たちが出題したオリジナルクイズの一部を掲載します。

問1 (津波について)

国連の決議で決まった「世界津波の日」World Tsunami Awareness Dayは何月何日でしょうか？

- ① 1月17日 ② 3月11日 ③ 11月5日

<答え・解説>

正解は「③ 11月5日」です。この日は、安政南海地震が起きた日で、梧陵さんの逸話にちなんで定められました。毎年「世界津波の日」には「高校生サミット」が開催されています。2018年は和歌山県広川町で開催され、世界各国の高校生が集まりました。



問2 (堤防について)

安政南海地震のあとに、梧陵さんが村人につくらせた「広村堤防」は、高さ何mでしょうか？

- ① 5m ② 8m ③ 10m

<答え・解説>

正解は「① 5m」です。「広村堤防」は、地震で仕事や財産を失った村人のために、梧陵さんが私財を投じて村人を雇い築造しました。そして、3年かけて完成した「広村堤防」は、およそ100年後に発生した昭和南海地震の津波から、村を守ったのです。

